月刊 Acanthus
（土浦一高・土浦中学とその周辺の物語）
第１３３号　　２０２０(令和２)年４月 14 日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/

厳島神社が祀られている黒坂命古墳（上）
同墳に建てられた「古墳記」碑の前に立つ堀越氏（右）

戦中・戦後の学校生活
～国民学校・新制中学校・新制高校・新制大学～

高５回堀越健一郎氏は、1934（昭和９）年 11 月３日、安中村（現美浦村）大塚で、父俊雄様、母華（はな）様のご長男としてお生まれになりました。2019（令和元）年 12 月 10 日、高 21 回松井泰寿・鴻巣茂が、戦中から戦後に掛けての学校生活をご自宅で伺いました。

文中の【　】内は筆者による注記です。

堀越家

堀越家は代々名主を務める家柄で、明治新政府が「五箇条の誓文」を公布した1868（明治元）年３月14日の翌日に、全国民に向けて掲げた「五榜の掲示」が、家には未だに残っています。

それより先、1847（弘化４）年に、堀越家が守ってきた黒坂命（くろさかのみこと）古墳【別名「弁天塚古墳」・学名「大塚古墳１号墳」】から石棺が出土しました。堀越家に滞在して、出土品を調査した色川三中（いろかわみなか）【土浦藩の国学者。大手町で薬種商を、川口で醤油醸造業を営む。佐久良東雄ら勤王の志士とも交流があった。】は、地域の伝承や『常陸国風土記』・『日本書紀』に基づいて『黒坂命墳墓考』を著し、石棺の主は『常陸国風土記』に登場する黒坂命であり、古墳は黒坂命の墳墓であると比定しました【三中は堀越家を黒坂命の末裔と確信し、『黒坂命墳墓考』を堀越家に贈っている。】。

国民学校・新制中学校での日々

1941（昭和16）年４月、私・堀越は、尋常小学校が改組された木原国民学校の最初の入学生となり、自宅から３km弱を歩いて通いました。空には【1938年12月、安中村（現美浦村）大山に開隊した鹿島海軍航空隊の下駄履き【フロート付き】の水上機が飛んでいました。航空隊の司令官は、皇族の久邇宮朝融王（くにのみやあさあきらおう）で、江戸崎の宿舎【現「大日苑」（注）】から自動車で通われていました。

木原村（現美浦村）木原には、【1942年頃に】海軍の木原送信所の高い鉄塔５基が建ちました。また、大須賀津【現関東農産（株）（東海漬物）工場付近】には監視塔が建てられ、敵機の来襲に備えて【村内の有志が交代で】監視に当たっていました。

４年生になる時に、教員をしている父の転勤で、龍ケ崎国民学校に転校しました。馬車に家財道具を積み込んで、一家で引っ越しました。龍ケ崎国民学校は、町場の学校だけに、２間【にけん 1.82m】の中央廊下や大きな作法室があるなど、立派な造りで、さすがは町場の学校だと感心しました。木原国民学校近くの舟子では、【1945年６月10日のB29による木原送信所を標的とした】空襲で５名の方が亡くなりましたが、龍ケ崎国民学校でも、軍需工場であった羽田精機を狙った戦闘機の機銃掃射を受けたことがありました。

戦後の1947（昭和22）年４月、発足したばかりの新制安中中学校に入学しました。開校式は、【1943年４月１日、八井田国民学校と大山国民学校の統合により安中国民学校が発足し】廃校となっていた八井田国民学校の校舎で挙行されましたが、あまりにもひどい建物でしたので、授業は、安中小学校と廃校となった大山国民学校とに分かれて始まりました。馬見山以西地域の私たちは安中小学校組で、職員室を仕切って、そこで学びました。生徒数は３学年で14～15人、先生は１人で、３学年複式授業です。その後、安中村馬見山にあった鹿島海軍航空隊の集会所【海軍下士官兵の互助組織である海仁会が運営していた。】の払い下げを受け、校舎として使用することになり、全校生徒が一緒に学べるようになりました。英語の授業は、航空隊跡にできた東京医科歯科大学霞ヶ浦分院【結核療養所】の先生が６ヶ月ほど担当しました。しかし、その年の暮れに火災で焼失してしまい、大山の航空隊跡に残っていた倉庫を校舎にして授業が続けられました。机や椅子は、航空隊の食堂で使われていた横長の大きなものでした。３年生となった1949年４月、待望の新校舎が安中村土浦に竣工し、みんなで大喜びしました。

学校生活もようやく正常に復してきましたが、1950年１月に、高校受験のために木原中学校に転校しました。当時は学区制が敷かれていて、安中村の安中中学校は、学区外のため、新制土浦一高をはじめとする土浦の高校の受験はできません。しかし、木原村の木原中学校は、「隣接市町村特例」で受験できました。江戸崎などの学区外から土浦一高を目指す生徒も、何人か来ていました。木原中学校は学力レベルが高かったので、土浦一高の学区内である阿見町の中学校からの転校生もいました。

吉田明一校長は、剣道錬士の腕前で、先生方とともに木原中学校の教育の質の向上に力を注いでおられました。先生方のそうした熱意があったから、生徒が集まって来たのだと思います。その吉田校長が受験前の集会で、どこそこを勉強しろ、と発破を掛けてくれ、それが結構当たっていたのを今でも覚えています。

受験会場は土浦二高でした。試験は国社数理の４教科。当時は、試験の結果が各中学校を通じて個々人に知らされ、それを踏まえ、志望校を決めました。担任の先生の勧めもあって、土浦一高を受験しましたが、合格通知が届くまでは心配でなりませんでした。

新制土浦一高入学

1950（昭和25）年４月、新制土浦一高全日制最初の入学生となりました。ゴシック式の校舎を見て、入学の喜びがより一層大きくなりましたが、授業が始まると、学力レベルの違いに呆然としました。新制度の混乱に加えて、安中中学校では、引っ越しも度重なるなど、十分な授業を受けていなかったので、やっていけるか、と心配になりました。

一番大変だったのが、夏の水泳の授業でした。霞ヶ浦で泳いだことはありましたが、泳ぎがあまり得意でなかった私は、初めて入った本校のプールにびっく

りしました。中央部は深さが２ｍもあり、背が立ちません。全員が６尺褌で、プールに放り込まれて、潜水を命じられ、あまり早く頭を出すと、プールサイドに陣取った岡田良典先生に足で頭を水の中に押し込められました。２、３年生になると慣れてはきましたが、恐ろしさは抜けません。

先輩方は、田舎者の私には　とても大人びて見えました。２年生（高４回）にとって、私たちは待ちに待った下級生なので、気合いを入れられるのでは、と思っていましたが、それほどでもありませんでした。しかし、弁論部に入った私は、秋の弁論大会で、開口一番、「諸君！」と語り掛けた途端、先輩たちから一斉に野次られ、びっくり。上がってしまい、しどろもどろ。原稿をようやく読み上げるという始末でした。先輩の怖さを思い知った一瞬です。

木炭バス（木炭自動車）での通学

本校への通学には、自宅から木原までは自転車ですが、木原から土浦駅まではバスを利用しました。江戸崎始発のバスと木原始発のとがありました。土浦駅から学校までは歩きました。駅前通りから保立食堂の前の桜橋交差点を右折して水戸街道に入り、新川の橋を渡って行きましたが、歩く距離は小中学校への通学距離の方が長かったので、何とも思いません。冬には、母が父のマントを仕立て直してくれたオーバーを着ていましたので、筑波颪も苦になりませんでした。逆に、歩くと汗ばむほどでした。家から学校まで約２時間掛かりました。

当時のバスは木炭バス（木炭自動車）で、燃料用の原油が不足した1930年代末から1950年代初めに掛けて使用されていました。

木炭自動車とは、車体後部に設置した木炭ガス発生炉で木炭や薪を燃やし、その際に発生する木炭ガス（一酸化炭素）を燃料として走る自動車です【エンジンはガソリンエンジンを転用できた。】。

ガス発生炉は、直径70～80㎝、高さ２ｍほどの円筒形で、底の部分には木炭を不完全燃焼させる装置があって、一酸化炭素ガスを発生させる仕組みになっていました【このガス発生炉から、運転席の前にあるボンネットの中のエンジンにパイプでガスを送っていた。】。

始発の木原停留所では、運転手と車掌とが発車の準備に大わらわでした。ガス発生炉の中に大量の木炭を詰め込み、その炭に火が行き渡るように、底に取り付けてある手回しの送風機で空気を送り込み、燃焼部で不完全燃焼を起こさせて、木炭ガスを発生させます。一酸化炭素が発生したら、手回しのハンドルを２人が交代で回してエンジンを始動させ、やっと動き出すことができます。

車体はマイクロバスくらいの大きさで、朝の時間帯には土浦へ通う高校生でいつも満員でした。乗降口のドアが閉まらないほどの混雑でしたが、誰からも文句は出ません。発車時刻になると、ゆっくりと走り始めます。エンジンの馬力が小さいためか、加速に時間を要するばかりでなく、時速30㎞がやっとで、自転車程度の速度だったと思います。燃焼の加減が難しく【一酸化炭素は、燃えないと発生しないし、完全燃焼でも発生しない。】、ガスがあまり発生しなくなると、運転手はバスを止めて、送風機で空気を送っていました。

車が少なかったので交通渋滞もなく、信号機もありませんが、土浦駅まで１時間弱掛かりました。特に梅雨時は、炭や薪が湿って、燃焼不足となり、よく遅れが出ました。そんな時は、「始業時刻に間に合わないから、一高まで行って下さい。」とお願いをすると、運転手さんも申し訳ないと思ったのか、一高まで延長してくれました。しかし、真鍋の坂が登れず、私たち乗客が降りて、後から押して一高前までやっと辿り着きました。

登下校で、土浦の町中を歩いていましたが、たまに真鍋坂下の寺田書店【一高の教科書を扱っていた。】に立ち寄るくらいで、食堂などのお店に入ったことはありません。本町【現中央２丁目】にあった銀映座で、年に数回、映画を見たくらいだったと思います。他の生徒も同様だったようです。これは、食堂や映画館などに入ることを禁止されていた土浦中学校時代の校風が残っていたことと、何より誰もが小遣いなどろくに貰えなかった時代であったからだと思います。

茨城大学を経て教員に

1953（昭和28）年３月、本校を卒業し、茨城大学教育学部に進学しました。校舎は水戸第二聯隊の木造兵舎で、土浦一高の校舎の方が立派でした。鉄筋コンクリートの建物は図書館くらいでした。

４年生の時には、第７回学園祭（現茨苑祭）の実行委員長を務めました。学長の東（あずま）龍太郎先生【在職1953～1958。】1959年から東京都知事を２期務めた。】に紹介状をお願いしましたが、先生はお忙しかったのでしょうか、代わりにご自身の名刺の裏に花押を書いて渡して下さいました。そこで、その名刺を持って、学習院院長安倍能成先生、法政大学総長の大内兵衛先生、東大総長南原繁先生の元を訪れ、講演のお願いをしました。阿部・大内の両先生は日程の都合が付きませんでしたが、幸い、南原先生が引き受けてくださいました。

当日は、学長の公用車で、南原先生を水戸駅までお迎えに上がりました。講演会場の講堂は２階にあり、床が抜ける虞があったので、入場制限をせざるを得ません。応援団員や運動部員に頼んで、ピケを張ってもらい、何とか入場規制ができました。入れなかった人のために、会場の外にスピーカーを設置して、屋外で立って聴いてもらいました。それでも、大勢の聴衆が最後まで先生の講演に聞き入ってくれました。

茨城大学を卒業すると、教員の道に進みました。1957（昭和32）年４月、母校の木原小学校が初任地でした。以後、阿見中、土浦一中、大谷小、県教育委員会（県南教育事務所派遣指導主事）、阿波小に奉職し、最後は木原小学校の校長で終わりました。そのため、現美浦村長をはじめとして、地元で頑張っている教え子が大勢おり、その活躍ぶりを見られるのは嬉しい限りです。令和元年11月まで支部長を務めた進修同窓会美浦支部会や勤務した小中学校の同窓会で、後輩や教え子と語り合うのが何よりの楽しみです。教員になって良かった、とつくづく思います。

（注）大日苑（稲敷市江戸崎甲2534）

江戸崎入干拓の生みの親である植竹庄兵衛が、自らの居住を目的として、（昭和14）年に建てた住宅で、江戸崎入干拓地を臨む台地に建っている。洋風建築と和風建築とを折衷した木造２階建で、外部意匠は、玄関から２階建部分に掛けてはアール・デコ風であり、座敷の部分は伝統的な和風のそれとなっている。明治の近代化を進める中での、和と洋を折衷させた典型的な住宅であるが、戦前に建てられた、中央の官公庁の施設や大資本家の住宅とは違い、各部分に意匠の自由さと奔放さとが見受けられ、茨城県内では他に例を見ない、貴重な住宅となっている。

（高21回　松井泰寿）